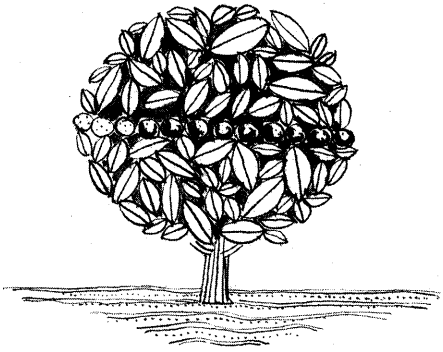
子どもとクリスマス

黒田　成子



クリスマスといえば大人にとってはプレゼントやお歳暮売り出しの宣伝等が目につく季節である。子どもにとってはお父さんがクリスマス・ケーキを買って帰る日、サンタ・クロースからプレゼントを貰える時として待たれる日である。

もともとクリスマスはイエス・キリストがこの世に誕生された事を祝う日であるが、その喜ばしい出来事はあまり一般には受け入れられていないようだ。むしろ年の終わりの楽しいイベントとして定着している現状である。であるから教会幼稚園の園長がお寺関係の人から「お宅でもクリスマスをなさるんですか？」と言われたことがあったそうだが不思議なことでもない。

筆者のM幼稚園は教会付属ではないがキリスト教主義で百名足らずの学校法人の園である。保育方針は遊びを中心としている。一日の流れとしてはどん

な行事を前にしても登園時から十時四十分までは自由遊びの時間である。毎日いつもと変わらず、たとえばセイント・セイヤごっこから高おにをしたり、箱製作をしたり、ままごと遊びなどをつづけている。クリスマスについての話し合いなどはそのあとの時間帯の事となる。

待つクリスマス

クリスマスは十二月二十五日の一日だけではなく、四週間前から始まる。クランツとよぶ常緑樹のリースをつるして一週間毎にろうそくを一本ずつ灯(とも)してイエス降誕の時を待つ。四本のろうそくに全部火が灯されると、クリスマスがやってくる。「あ、クリスマスがくるんでしょう」「四本火がついたらクリスマスだよね」と言いながら子どもたちは去年の楽しかったクリスマスを思い出しているようだ。子どもたちは暗やみの中に赤々とかがやくろうそくの光りをふしぎそうに見つめる。それから「アドベント・クランツにあかりが、つ、い、て」と軽やかなリズムのクリスマス・キャロルをみんなで歌う。クリスマスのことを知らない年少組のこどもたちも、何となくうきうきして喜びの輪がひろがる。

クリスマスは二学期の終わりに当たるので一般には学芸会や子ども会が行われる園が多い。保育者達にとってはプレゼントの作製や劇の段どり、装飾のこと等雑多なことがあり、当日の準備に前日や前々日は夜までかかったりする。しかし、クリスマスの迎え方は当日パッと打ち上げる花火のようなものではなく、何週間も前から子どもたちと共に生活の中で毎日少しずつ準備して行くものでありたい。

たとえばクリスマスを迎えるのにどんな用意をしようかということを子どもたちと話し合う。自分たちの部屋を掃除してきれいにしよう。壁に飾るものをつくろう。貯金みたいに献金を少しずつため、アフリカの子ども達に送ってあげよう。プレゼントをつくろう。(でもお母さんにはだまっていることに

して）クッキーを焼いてクリスマスの時にみんなでたべたい。劇もしたい。これらの経験を少しずつしていくうちに子どもたちはクリスマスへの期待をふくらませながら、心をこめて仕事をすることや待つことを身につけていく。

クリスマスって大好き！

子どもたちはクリスマスの意義を理論的に理解することはむずかしいが、クリスマス・カードや絵本のさし絵、美しい音楽、ほのぼのとしたろうそくの光り、しずかに語られる話や心をこめた祈りなどを通してクリスマスの喜びを体で感じていく。

子どもたちはイエスさまがベツレヘムの貧しい馬小屋で生まれた話や、星の降る夜に羊の番をしていた羊飼いたちに、天使があらわれ、救主降誕の喜びのしらせをもってきた話、それから「くつやのマルチン」のような心暖まる話などをきくのをたのしみにしている。「クリスマスって大好き！」と子どもは言う。「どうして？」とたずねると「だって、うれしいことがいっぱいあるんだもの」「毎日クリスマスだといいナ」とも言う。

保育者たちは何のためのクリスマスかをよく考えて準備し、子どもたちにも聖書を開いて見せ、初めてのクリスマスの話をやさしく話したりする。スライドを何枚もうつしながら二千年前のイエスさま降誕の様子を子どもと共に見入る時も楽しい。

礼拝の中のページェント

子どもたちのたのしみにしているクリスマスのハイライトは「ページェント」といわれる聖劇である。もともと移動舞台という意味から中世宗教劇のことを言うようになった。また一説にはクリスマスの宗教劇はアッシジのフランシス（十三世紀）にはじまるという伝説がある。町の洞穴の中に降誕の場面を再現し、フランシスは、憎しみをすてて平安を保ちなさいと町の人々に教えた。それはちょうどは

じめてのベツレヘムの夜のように大変印象的で多くの国々へひろがったということである。が、クリスマス・ページェントと名づけられるようになったのは二十世紀初めのことらしい。

それはともかく、子どもたちはページェントを毎日たのしみにして遊ぶ。昔は配役について誰がマリヤになるか、星や博士、羊はどの子どもにするかなどをきめるのに一苦労であった。が、今は劇の特訓をして保護者に見てもらうことよりももっと子ども中心のあり方が多くなっていると思う。M幼稚園でも子どもたちがやりたい役をかわるがわる演じ、十分にたのしめるようにしている。

思う存分たのしんでからクリスマス近くになるとページェントの役を決める。（時には当日の朝にやっと決まることもある。）ページェントをするにはクリスマス・ストーリーの意味を知ること、演ずる人は役割になりきってすること、会衆が一体となること等の点が大切であるとされている。M幼稚園では当日、第一部を礼拝とし、さんびかやお祈りがあり、子どもたちのページェントが行われる。お母様達もたとえば「聖しこの夜」のさんびかの合唱をしたりして礼拝に参加する。第二部はみんなで作ったクッキーとお茶でテーブルを囲み、ゲームやプレゼント交換等をして楽しくすごす。一部も二部も子どもたちの喜びが最高潮に達し、忘れられない楽しい思い出の時となる。

ページェントと子どもたち

次に昨年度の年長組のページェントについて担任のI教諭の実践記録から引用してみよう。

「…マリヤの役については、女の子の中で希望が多かった。特にS子は去年もやりたかったのだが、病気のためできず、その思いはひとしおだったようだ。何回かマリヤをするうちに、セリフも動きもとてもよく自分のものにしていて〝やりた

い〟という思いが伝わってくるようだった。

M子もマリヤをしたいと思っていたのだが、彼女はいかにもM子らしく、ひかえめであった。そしていよいよクリスマスに近い日に『マリヤさんは一人で話したり、うたったりするから大きい声の出る人がいいと思う』と担任が提案したところ、意を決したようにM子が手を上げ、みごとにマリヤの役をこなしたのである。

そこで当日、担任は決めかねてS子とM子を呼んで希望を聞いた。するとS子は『マリヤさんもやりたいけれど、一度もやったことのない星もやってみたい』と言い、M子は『マリヤさんをやりたい』ということだった。そして担任が口をはさむ間もなく『じゃあ私が星でMちゃんがマリヤさんになればいいよ』とS子が言ったのである。今まで初めてのことは苦手だったS子が星をやってみようと思ったことも、なかなか自分の気持ちを表に出さないM子が『どうしてもマリヤさんを

やりたい』と言ってそのためにがんばったことも驚きであった。このことはほんとうに二人の成長ぶりをよく示したこととしてうれしかった。

このように、それぞれの力を生かすようなページェントができ、子どもも親も、保育者も、思いを一つにして主のご降誕を祝うことができたのは本当に感謝である。」

それにしてもS子もM子もマリヤさんはすてきだナという思いがよほど強かったらしい。マリヤがある日静かに一人で祈っていると天の使いがあらわれ、あなたは救い主になる赤ちゃんを産むでしょうと告げる場面は二人にとって、とても印象が深かったらしい。

しかしS子には星も魅力的な役であったようだ。星は沢山あるがクリスマス・ページェントに出てくる大きい星はらくだに乗った博士たちを遠い東の国から暗い夜道も光りを照らしながらイエス様の誕生されたベツレヘムまで導いたのである。この話も子どもたちは大好きである。星のリズムも自分たちで考案し、音楽に合わせて踏むステップは軽く、自信にみちていた。

クリスマスの意味は赤ちゃんイエス様の誕生を共に喜ぶことにある。子どもたちがこの喜びを感じとってくれると同時に、様々の経験を通して一人ひとりが自分なりのクリスマスのイメージをふくらませることができる時であってほしいと思う。

（武蔵野相愛幼稚園）